

人文会 ニュース

jimbunkai news

August 2018

NO. 129

1 代表幹事挨拶

2 15分で読む

天皇の歴史

18 書店現場から

3 度目の挑戦

——未来をつなぐ書店に

24 図書館レポート

公共図書館と「出版」

——千代田図書館10年の取り組みから

委員会活動方針

人文会活動報告

人文会年次総会報告

田崎洋幸

倉本一宏

石崎久康

河合郁子



www.jimbunkai.com

**〈大学〉の本質を明示し、直面する
課題に迫る新事典登場！**



大学事典

児玉善仁 ほか 編

B5判／上製／
函入り／952頁

中世ヨーロッパに生まれ、高等教育機関の中軸として世界に展開する〈大学〉。その歴史と現状、組織と機能、社会との関係を多角的かつ詳細に解説する、本邦初の本
格事典。 本体25,000円＋税

表示価格は本体価格です。別途消費税が加算されます。

平凡社 〒101-0051
東京都千代田区神田神保町3-29
tel 03-3230-6573 fax 03-3230-6587
<http://www.heibonsha.co.jp/>

日本評論創業100年記念出版

こころの臨床を語る

——「こころの科学」対談・座談選

「こころの科学」編集部〔編〕 ◎2600円＋税

時代が変わっても古びない臨床の本質とは何か、将来に向けての課題はどこにあるのか。第一人者たちが忌憚なく語り合った貴重な記録。

笠原 嘉・風祭 元／大塚恭男・中井久夫／小此木啓吾・北山 修ほか



こころの科学〔記念増大〕 **200号**
1550円＋税

特別企画 **子どものこころと脳**

青木省三、宮岡 等、福田正人〔編〕

「こころと脳」という視点を踏まえて子どもの発達を考え、発達障害などのつまずきを理解し、治療や支援についても考える増大号。

 **日本評論社** <https://nippyo.co.jp>
〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL03-3987-8621/FAX03-3987-8590

法政大学出版局

<http://www.h-up.com/>

《叢書・ユニベルシタス 1079》

ボーヴォワール

J. クリスティヴァ著／栗脇永翔、中村 彩訳
ボーヴォワールがその生涯と作品で示した、不調和をはらみつつも個々人が対話を試みる思考の場としてのカップル像を読み解く。
2700円

《叢書・ユニベルシタス 1076》

依存的な 理性的動物

ヒトにはなぜ徳が必要か

A. マッキンタイア著／高島和哉訳 ヒトと動物の間の伝統的区別を批判し、人間を共同体のなかで他者に依存してはじめて開花しうる動物と規定する、徳倫理学の画期的明察。
3300円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税別です

「真珠湾」をめぐる日米の諸相を網羅

パール・ハーバー

恥辱から超大国へ



クレイグ・ネルソン 平賀秀明訳

前史から、「卑怯な騙し討ち」、凄惨な攻防、原爆投下、現代まで、米のノンフィクション作家が両国の戦いの諸相を縦横に網羅した大全。

◎本体価格各3800円＋税

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 / fax.03-3291-8448

代表幹事挨拶

みずず書房 田崎洋幸

二〇一八年五月十六日に行われた人文会年次総会において、代表幹事に再任されました。書記幹事の片桐幹夫氏（晶文社）、会計幹事の平石修氏（御茶の水書房）も再任となりました。委員会構成も変更はありません。〈販売・企画〉・〈調査・研修〉・〈広報〉の三委員会制を継続することになり、〈販売・企画委員会〉委員長の朝倉哲哉氏（法政大学出版局）、〈調査・研修委員会〉委員長の水口大介氏（創元社）、〈広報委員会〉委員長の岩野忠昭氏（白水社）の三氏には引き続き、幹事として各委員会を担当していただくこととなりました。また、〈販売・企画委員会〉副委員長に森卓巳氏（青土社）が新任され、〈調査・研修委員会〉副委員長の片山伸治氏（吉川弘文館）、〈広報委員会〉副委員長の乙子智氏（慶應義塾大学出版会）の両氏は再任されました。今後一年間、この体制で活動いたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

人文会は今年、創立五十周年を迎えることができました。諸先輩方の努力の賜であり、人文会に関わった全ての方々に深く感謝申し上げます。記念フェアの開催、人文会ニュース特集号の発行など、記念の年に相応しい企画を用意しております。今後は一般読者へのアピールも積極的に行うことで、出版業界に貢献する人文会の立ち場を明確にしたいと思います。次の五十年に向かって気を引き締め、歩んで参りますので、引き続きご協力賜りますよう、お願い申し上げます。

休会していた平凡社が復会いたしました。が誠信書房が休会となり、今期も十九社での活動となることをご報告いたします。

天皇の歴史

倉本 一宏（日本古代史）

はじめに

最初にお断わりしておく。15分で天皇の歴史を理解するのは不可能である。ましてや、15分で天皇の歴史を理解させる文章を書くのは、さらに不可能である。

また、私の専門が日本古代史であるため、叙述が古代の天皇中心にならざるを得ないことも、どうかご海容いただければ幸甚である。

ときに私は、日本文化を国内外に発信し、外国の研究者の研究支援を行なう研究所に勤務している。海外で講演やシンポジウムを行なったり、外国の研究者と共同で研究を行なったり語り合ったりする機会が多いのだが、

彼らが日本の歴史に対して抱いている誤ったイメージの中で、最たるものは、一つには日本は戦争ばかりしてきた国であるということ、もう一つは天皇はエンペラーであり、独裁者であったと思っているということである。

一応、海外の一流の研究者を招いているにもかかわらず、彼らの認識はこの程度なのである。これでは日本に対する正しい理解に進めるとはとうてい思えない。私は外国で講演を行なう際には、マクラとしてこの二つの実像を訴えることにしている。

「天皇」の地位

最初に「天皇」という地位と称号の成立について、簡

単に述べておこう。弥生時代から「王」と自称する首長は存在し、中国王朝の冊封も受けていたが、倭王権が成立したのは、三世紀中頃のこととされる。

ただし、これはあくまで考古学的な成果から導き出された結果であって、初期倭王権の盟主墳と記紀の伝える「天皇」とを結び付けたりするのは、まったく意味のないことである。万世一系の天皇系譜というのは、まったく形成されていなかったのみならず、倭王権の盟主を出す血縁集団すら、六世紀までは固定されてはいなかったのである。

さて、五世紀中葉の築造とされる千葉県稲荷台1号墳から出土した鉄剣の銘を見てみると、ここには単に「王」という称号が見え、いまだこの時点では「大王」号が成立していなかったことを示している。

次いで、江田船山古墳出土大刀の刀背には、「治天下獲□□□鹵大王」という称号が刻まれている。倭国の君主号として「大王」が成立し、彼らは自らの支配が及ぶ地域を、「天下」と称している。天下というものをこのように考えるといふ觀念は、倭国独自のものであり、後世に日本独自の「天皇」号が成立する素地が、すでにこ

こに表われている。

また、稲荷山古墳出土鉄剣に四七一年に刻まれた銘文にも、「獲^わ加多支^{かたけ}鹵大王」と見える。朝鮮半島において、新羅を支配下に置き、百済と抗争を続ける高句麗の王が、四世紀末に「太王」号を称していたが、同じように百済への軍事支配権を主張していた倭国の王も、この頃、「大王」（オホキミ）を称し始め、高句麗と対峙する「天下」の支配者としての地位を主張したのである。この「獲加多支鹵大王」は、倭の五王の最後の人物である大泊瀬幼武^{おほつせのこむすひ}（記紀の伝える雄略）であろうと考えられる。

なお、この五世紀の「倭の五王」のみが日本列島の中央王権としては唯一、中国皇帝から冊封を受けた。七世紀以降の遣隋使や遣唐使は、中国から冊封を受けていないのである。

雄略が死去してからの大王位継承については不明確な部分が多い。私は数年の空位を経て、前王統の手白香王女との婚姻により、いわば倭王権への婿入りという形で即位を要請された越前・近江を地盤とした地方豪族である男大迹王が即位した（継体）と考えている。

手白香王女は天国排開広庭王子^{あめくわしはろひろのわらひ}（後の欽明）を儲け、こ

こに血縁集団としての大王家が確立した。ただし、継体が尾張の地方豪族との間に儲けていた勾まがりの大兄王子おおい（記紀の伝える安閑）や檜隈ひのきのかた高田王子（記紀の伝える宣化）との抗争を経てのことであった。

その後、蘇我系王族と非蘇我系王族との対立が続き、皇極四年（六四五）の乙巳の変、それに続く「大化改新」に至ったが、君主号としての「大王」は変わるところはなかった。

なお、非常事態に際してのものとはいえ、乙巳の変の後の皇極の退位が、倭国における最初の退位であった。律令制以前の大王は、退位の慣習がなく、また皇太子制も成立していなかったため、大王が死去した後に、成人している有力王族の中から次の大王が選ばれ、豪族層の推戴を承けて即位するという繰り返しであった。

女帝について

この間の過程で、何人かの女性大王および女性天皇が即位した。まず、大王崇峻の死亡時には、非蘇我系の押坂彦人王子と蘇我系の竹田王子・厩戸王子など次世代の

大王候補が多数存在し、そのうちのどれを選ばいいかわからない状態だった。

政治抗争を避けるための緊急避難的な措置として、世代交代を先送りし、それまで前太后として紛争の解決や調整に実力を見せてきた大王欽明の王女である額田部王女ぬかたべを即位させた（推古）。こうして欽明王子女の「世代内継承」が行なわれ、はじめての女性大王が出現したのである。

同様の事例は、大王舒明死後の非蘇我系の中大兄王子ふるひとのおおえ、蘇我系の古人ふるひとのおおえ大兄王子・山背大兄王やましろのおおえの選択を回避した宝王女の即位（皇極）にも行なわれた。また、天武天皇の死後には草壁皇子、文武天皇の死後には首皇子という後継者が存在したのであるが、それぞれ健康上や出自の事情があり、持統天皇や元明・元正天皇が即位した。もちろん、すべて、豊富な政治経験を有しており、激動の政治情勢に対応できる人材が求められたことにもよる。

「天皇」号の成立

「天皇」という君主号がいつから使われたかは、推古

の時代という説と天武の時代という説が存在する。現在では、唐の高宗が「天皇」号を使用した時期があったこと、天武が道教に傾倒していたこと（「天皇」は道教の最高神である北極星を表わす）、天武朝に記された飛鳥池遺跡出土木簡に「天皇」という記載があったことを根拠として、天武朝始用説が有力であろうと思われる。

しかし私は、もう一つの可能性を考えている。「大王」以後、「天皇」となる前に「天王（てんおう）」と呼ばれた時代があつて、その訓み方が「天皇」に残ったのではないかというものである。かつて宮崎市定氏が主張されたところである。「天皇」という字を素直に訓んだら、「てんこう」となるはずであるが、にもかかわらず、「てんのう」と訓んでいるのは、もともと「天王」と表記されていたからではないだろうか。

遣隋使は、『隋書』東夷伝倭国条によれば、倭王の姓は阿每（あめ）、字は多利思比孤（たらしひこ）、号は阿輩鷄弥（おほきみ）であると称した。この「あめたらしひこ」に対して、「天王」という表記を用い、音読する際に「てんおう」と読まれ、「ん」と「お」がつづまって「てんのう」と発音されたのではないだろうか。天武の時代

から「天皇」号を称した際にも、訓み方はそのまま「てんのう」が慣用されたと考えられる。

天皇という称号は、中国における天帝の「天」と、皇帝の「皇」を組み合わせたものである。中国から見るときわめて尊大な称号であるから、遣唐使は「すめらみこと（主明楽美御徳）」と読んだのであろう（『唐丞相曲江張先生文集』所収「勅日本国王書」。「すめらみこと」は清浄な貴人という意味で、権力者を指す言葉ではなく、政治権力を超越した存在である。現実の政治権力とは一線を画して権力の源泉になるという意味で、この言葉は古代以後の天皇の有り様に合致している）。

その際、専制君主的相貌を持っていたとされ、中国風の易姓革命を将来に起こさせる危険性と隣り合わせであった大津皇子ではなく、調整型・機関型・象徴型・超越型の草壁皇子が天武の後継者として選ばれたということとは、その後の律令天皇制の成立、ひいては日本の歴史における天皇の存続に際して、大きな影響を持ったものと考えられる。

律令国家における天皇は、結果的には中国的な絶対的専制君主ではなかった。天皇と諸氏族層との間には相互

依存関係が存在し、中国からもたらされた高度な統治理念による専制的相貌をまといながらも、倭王権以来の伝統と、激動の北東アジア国際情勢に対しての現実的な関わりとによって形成された非専制的な実体を持った天皇制だったのである。

中国の皇帝は、天の天帝から天命によって地上(天下)の支配を委託されたことを、支配の根拠としていた。皇帝の政治がよければ天帝は地上に祥瑞を出現させてこれを示し、政治が悪ければ災異をおこしてこれを示す。それが重なれば天命が他の者に替わって下され(易姓革命)、他の者が悪い皇帝を討伐して皇帝となり、新たな王朝を創始する。

ところが日本は、この易姓革命の思想を採用せず、代わって天皇の支配の根拠を神話に求めた。高天原の天照大神が孫の瓊杵尊(にぎはこ)を地上に降臨させ、その曾孫が大和に入って即位し、初代神武天皇となる。そしてその子孫が代々、天皇位を継承するというものである。こうした制度を作ったことが、後世に至っても、天皇という地位が存続する要因となった。

現実的に天皇よりも強い権力を手に入れた者も、天皇

個人を倒すことは可能であっても、それに代わる支配の原理を新たに作り出すことは不可能であった。しかも、藤原氏自身が、瓊杵尊が降臨した際に五伴(いっどものお)緒を率いてそれに随伴して護った天兒屋命(あめのこやねのみこと)を先祖として設定したために、後世に至っても、天皇家を倒すことができなくなったのである。それよりも、自分の女を天皇の後宮に入内させ、皇子を産ませてそれを次代の天皇として即位させ、その後見を務めるという方策の方が、はるかに簡便であったのである。

その後の日本君主号

七世紀末に天皇号が使われ始め、飛鳥浄御原令で法制化された。飛鳥浄御原令は現存しないが、大宝元年(七〇二)に制定された大宝令における君主号は判明する(大宝令も現存しないが、養老令から推測することができる)。

そこでは、あらゆる局面で天皇号が使われていたわけではない。祭祀に際しては「天子」、詔書では「天皇」、華夷に対しては「皇帝」、上表に際しては「陛下」、服御に際しては「乗輿」、行幸に際しては「車駕」と、それ

ぞれ称することと規定されている。

なお、讓位した帝を「太上天皇」と称するともあり、太上天皇は現役の天皇と同じ権能を有していた。十五歳で即位した文武天皇を統緒太上天皇が後見しなければならなかったという事態によってつくられた制度である。

その後、奈良時代を通じて、太上天皇は常に一人ずつ存在した。太上天皇が死去すると天皇が退位して太上天皇となり、皇太子が即位して天皇になるという繰り返しだったのである。平安時代に入ると、「太上天皇」を略して「上皇」と称されることも多くなった。

弘仁十四年（八二三）、嵯峨天皇は讓位と共に内裏を退去して後院に入り、自ら「天皇号」を除いて、「人臣の列」に入ろうとした。新たに即位した淳和天皇は嵯峨に太上天皇号を奉上了したものの、太上天皇が制度上は天皇の権力の下に置かれることが慣例となり、ここに天皇の制度が確立したことになる。

平安時代中期、いわゆる摂関期に入ると、君主の称号は在位中の天皇であっても「天皇」から「院」に変化したと説かれることが多い。『大鏡』などの「歴史物語」や説話集に見える記述を根拠としたものであろう。

たとえば『大鏡』で歴代を列挙している箇所では、村上以前は「村上天皇」などと表記されているのに対し、次の冷泉に至ると、「冷泉院」「冷泉院天皇」と表記される。円融も「円融院」「円融院天皇」と同様である。花山は「花山院」「花山天皇」と両様の表記となるが、一条は「一条院」、三条は「三条院」、後一条は「後一条院」と、「院」号のみの表記となる。どうやら十世紀後半の冷泉と一条が画期であるかの書きぶりである。

しかしながら、これは『大鏡』が作られた十一世紀末の院政期から見た認識であり、必ずしも当時の変化を正確に反映したものではない。ここで『大鏡』で画期とされている一条の時代を中心とした古記録に見える君主呼称を見てみたい。藤原実資の『小右記』、藤原行成の『権記』、藤原道長の『御堂関白記』を見たところ、

天皇	皇帝	内上院	公	帝	御主	主上
天子	聖主	聖上	至尊	今上	公家	法帝
帝王	当代	当今	明王	聖上	宸儀	内裏御所
大内	太内	御門	国家	国王	新主	新帝
旧主	先主	先朝	当帝	聖体	帝皇	一人
など、	平安貴族は、	様々な呼称で	君主を記録していたの			

である。

摂関政治と天皇

かつて、摂関政治は藤原氏の摂政・関白が「政所政治」を行ない、天皇権力を蔑ろにして専横を極めた異形の政治形態として、非難の対象とされてきた。しかし、「政所政治論」に対する疑問が次々と提出されて以来、摂関政治は古代国家の支配体制の発展の帰結であって、摂政・関白の政治的権限を過大に評価すべきではないという理解が一般的になった。

そして、天皇と摂関を別個の政治権力としてとらえるのではなく、天皇と、天皇への親権行使者としての父院（もしくは国母）と、キサキや国母を介した外戚として天皇とミウチ関係にある摂関（ないしはそれに准じる官人）とを構成員とする、権力の中核部分が一体となって王権を構成し、当該期の政治を実質的に領導していたものと考えられる。

このような政治の安定化（固定化）は、内部においては熾烈な政権抗争や貴族層の地位の浮沈を生み出している

とはいえ、全体的には文字どおり「平安」な時代を存続させることになった。天皇についても、それ以前のような現実的なリーダーシップやカリスマ、政治的な決断力やましてや軍事的な指導力が求められなくなったため、かえって安定的に継承されることとなった。

なお、特に摂政という地位の成立の大きな機縁となったのは、幼帝の出現であった。文徳天皇の死後、藤原良房を外戚とする皇太子惟仁親王（これひと）が九歳で即位することになった（清和天皇）。良房に天皇大権を摂行させたのが、後の摂政につながったのである。

ただし、この政治体制が万全に機能するためには、摂関の女が后妃となって天皇に入内し、皇子を産んでそれが成長し、無事に即位することが条件となる。平安時代を通じて、このような幸運を手に入れたのは、清和天皇の時代の良房、一条天皇の時代の兼家、後一条天皇の時代の道長の三人しかいない。摂関政治とは、きわめて危うい偶然の僥倖に左右された政治体制だったのである。

この僥倖を最大限に手に入れた道長であったが（四人が天皇もしくは東宮のキサキとなり、三人の皇子を儲けた）、その次の世代の頼通には女がおらず、代わりに入内させ

た養女二人には皇子が生まれなかった。弟の教通も女二人を入内させたが、これも皇子を産むことはなかった。こうして偶然の幸運に支えられた摂関政治は、偶然の幸運によって終焉を迎えることになったのである。ただし、これがまったくの偶然なのか、それとも天皇の「政治的」選択によるものなのかは、考慮の余地を残している。

院政と天皇

こうして、母方のミウチが天皇の政治意思を代行したり（摂政）、影響を与えたり（関白）する摂関政治に代わって、父方のミウチ（尊属）である上皇が天皇の政治意思を代行するという院政が始まった。ただし、退位した天皇がすべて院政を行なうことができたわけではなく、「治天の君」と呼ばれる上皇のみが、院政を行なえたのである。

また、院政の意志を持っていたと言われている後三条天皇や、院政を始めた白河天皇が、必ずしも政治体制の变革を意図してこの政治形態を始めたのではなく、自己の希望する皇子に皇位を伝えたいという願望が要因と

なっていたことは、考慮しなければならない。

加えて、院政が行なえた背景としては、摂関の地位が「摂関家」と呼ばれる道長―頼通の直系に固定され、それとは別に天皇家の外戚となる家（閑院流）が存在したという、藤原氏内部の問題も、大きく影響している。摂関になっても外戚ではないので権力は強くはなく、外戚になっても摂関の地位は手に入れられないので、権力は強くないといった矛盾を呈していたのである。

強力な政治力と経済力、そして軍事力を手に入れた院は、専制的な相貌で政治の場に姿を現わし、熊野など諸国への御幸や、六勝寺などの寺社の造営、絵巻などの制作に力を注いだ。その否定的な側面が強調されがちであるが、これらの事業が日本に及ぼした影響は、地方への文化の波及、交通の整備、仏教の再編、そして何より、文化が権力の象徴であるという認識を生み出したという点において、積極的に評価されるべきものである。

また、この時期に頻発した南都北嶺の強訴に対応するために、白河院が貞盛流伊勢平氏や河内源氏などの武家を利用したことが、後の武家政権につながる要因となったことも、日本の歴史に大きな流れを作った。

こうして治天の君が実質的に君主の役割を担い、「天皇は東宮の如し」という様相を呈することになったのである。ただし、幾人も存在する上皇（太上天皇）の中で、誰が治天の君の地位に即くかをめぐって、天皇家（王家）内部の抗争が始まることとなった。同時期には、摂関家内部における政権抗争や、武家の棟梁をめぐる勢力争いも、源氏・平家の内部で存在した。それぞれの勢力が、それぞれ上皇や天皇と結び付いたため、その抗争を一挙に解決するべく、大規模な内乱が勃発することとなった。こうして武士が政治的にも発言力を増大させ、日本は自力救済（＝暴力）を旨とする中世を迎えることとなったのである。

鎌倉時代の天皇

鎌倉幕府の置かれた時代になっても、京都の朝廷や天皇家（治天）の重要性は衰えることはなかった。そもそも、征夷大將軍という職自体が、天皇から補された朝廷の地位であった。後白河院がついに生前は頼朝にこの地位を与えることを拒否していたように、あくまで朝廷側の意

向によって補されるという性格のものであった。文治五年（一一八九）に奥州藤原氏を滅ぼした源頼朝が建久元年（一一九〇）に上洛した意図が、権大納言・右大将への任官もさることながら、女の大姫の後鳥羽天皇への入内工作であったとされていることが、両者の関係を如実に物語っていると言えよう。

この朝幕関係に変化をもたらしたのは、承久三年（一二三二）に起こった承久の乱の後である。後鳥羽院の追討宣旨に反発した幕府は、逆に京攻めを行ない、朝廷軍を蹴散らして京都を制圧した。そして後鳥羽院の治天の地位、承久の乱に備えて即位させたばかりの天皇の地位を廃したうえで、これらと彼らの皇統の皇族を配流に処した。廃位された天皇はまだ四歳であった。長く九条廃帝と称されていたが、一八七〇年（明治三）に、仲恭天皇という諡号が贈られた。

摂政九条道家も更迭され、多くの貴族も処刑されて、ここに朝廷権力は決定的な打撃を受けることとなったのである。幕府は天皇や摂関の人事に対しても責任を持つ立場となり、日本の国家史に大きな画期をもたらした。

しかしなお、朝廷（＝天皇）が日本国を支配し、幕府が

それを支えるという理念は継続したのである。仁治三年（一二四二）に幕府によって嫡流とされた守貞（後高倉院）流の四条天皇が死去すると、幕府は土御門天皇皇子の後嵯峨天皇を新天皇に選んで即位させた。

後嵯峨天皇は自分の皇子である後深草天皇に譲位すると、後深草の同母弟である恒仁親王（後の亀山天皇）を皇太弟に立て、それに譲位させた。ただし、後嵯峨は後深草・亀山のどちらを治天とするかの判断を幕府に委ねた。しかし幕府はこの判断を保留し、文永九年（一二七二）の後嵯峨の死後、亀山が治天と決まった。亀山は皇子の後宇多天皇に譲位して院政を始め、亀山皇統（大覚寺統）が確立したかに見えたが、弘安十年（一二八七）、幕府は後深草皇子の伏見天皇への譲位と後深草院政の開始を指示した。伏見の皇子である胤仁親王（後の後伏見天皇）が立太子するに及び、後深草皇統（持明院統）が並立することとなった。ここに両統の対立が始まることとなる。

その過程において、大覚寺統の傍流に過ぎなかった後醍醐天皇が、自己の皇子に皇位を継承させるには、幕府を倒すしかなかった。こうして数々の政変の後、元弘三年（一二三三）に幕府は滅亡し、「建武の新政」が始まる。

室町時代の天皇

しかし、建武二年（一二三五）、後醍醐と足利尊氏の関係は決裂し、後醍醐は都を出奔した。尊氏は持明院統の光厳院に院政を行なわせた。翌延元元年（一二三六）には光厳の同母弟である光明天皇が即位し、ここに南北朝に二人の天皇が並立する事態となった。

その後の「観応の擾乱」の過程で、直義と対立する尊氏・義詮は南朝の後村上天皇に降り、後村上は京都に向かった。また、直義死後に後村上を駆逐した結果、京都には上皇も天皇も東宮もいなくなるという異常事態が現出したことは、重要である。

しかし南朝の方も、京都を奪還することは徐々に困難になっていった。そもそも南朝には、政府を構成する公家が存在しなかったのである。

幕府のみならず公家社会も制覇した義満は、明德三年（一三九二）から南北朝合一への動きを始めた。同意された合一の条件は、1. 南朝に伝えられた三種の神器を「讓国の儀」によって北朝の後小松天皇に引き渡す、2.

以後は両朝御流が交互に皇位に即く、3. 天皇家領のうち、国衙領は大覚寺統、長講堂領は持明院統が相伝する、というものであった。ここでは、南朝を正統と認めたことになる。こうして後龜山天皇は大覚寺に入って隠遁生活を送り、南朝は接収された。合一条件が反故にされたことは、言うまでもない。

その後、義満は明に使節を送り、応永九年（一四〇二）に「日本国王源道義」に冊封された。ここに日本は二人の王を戴くことになったのである。しかしその場合も、内廷における公事儀礼は、後小松天皇の許で行なわれていた。寺領安堵や公家の家門安堵なども同様である。中世における天皇存続の理由の一端が窺える。

義満は皇位を篡奪しようとしたという解釈も存在するが、それを果たすことなく、応永十五年（一四〇八）に急死した。朝廷は「太上法皇」を追贈しようとしたが、幕府はこれを辞退した。これによって、もしかすると日本史上唯一の事例であったかもしれない王朝交替の試みは頓挫したのである。

その後、皇統は交替した。後小松から皇位を譲られた称光天皇には皇子がなく、立太子した小川宮も早世した

ため、後光厳皇統は断絶したのである。仕方なく崇光院の曾孫にあたる後花園天皇が即位し、以後は現在に至っている。

応仁・文明の乱（一四六七―七七）を経て、多くの公家は地方に下り、在国の状態を続けた。しかし、天皇だけは京都を離れるわけにはいかず、内廷収入は困窮して、大嘗会はおろか即位礼も挙行できない状態が続いた。天皇の政治権力も空洞化していったが、それでもなお、天皇は日本に必要な存在として存続した。家業と世襲をはじめとする様々な局面の権威の根源として、また年中行事をはじめとする暦事を中心軸として、その存在は不可欠とされたのである。

近世以降の天皇

これ以降の天皇については、もはや私の能力を超えている。いくつかの点を指摘するに留めておきたい。近現代の天皇についても、日ごろ考えるとところはあるのであるが、紙幅も尽きかけているので、別の機会を待つこととした。

注目すべきは、前近代においては、天皇は「見えない王」であり、宮廷の奥深くに存在して、外からはその姿を窺い知ることができない存在であったという点である。京都の人や、よほどの知識人を除けば、江戸時代、特に地方の民衆は、天皇の存在自体をどれほど認識していたのであろうか。

さて、大日本帝国憲法下における天皇の権力を強大なものと考えer人が多いものと思う。旧憲法では、天皇について、様々な権能が明記されているが、逆に言うところしか権限を有していなかったと考えられるのではないであらうか。大日本帝国憲法に定められた天皇大権とは、緊急勅令、条約締結、宣戦、戒厳令、統帥権（軍事指揮権）、憲法改廃権などを指す。しかし、たとえば帝国議会閉会中に発せられる緊急勅令も次の議会の承認を必要としたし、条約締結なども政府が行ない、それを承認するという形式であった。

一方、古代の天皇の意思を表わす詔勅は律令に優先するため、まさにオールマイティの権能を有していた。やろうと思えば、たとえば全国に国分寺を造営するとか、都をすぐに遷すとか、何でもできたのである（日常的に恣

意を発現した天皇は、実際にはほとんどいなかったであらうが）。

ただし、本当に強い権力を持っていたのは、大王天智、そして天皇という称号ができた直後の天武・持統天皇ぐらいであらうが、その天武・持統天皇も独裁者ではなく、支配者層の利益を体現した支配者であった。日本の歴史において、独裁君主は一度も現われなかったことになる。

年号の歴史

ここで前近代における年号について述べておきたい。日本人の多くは、最初の元号は大化であると思っているであらう。しかし、七世紀の大化・白雉・朱鳥という元号は、『日本書紀』にしか出てこず、他の史料にはいっさい書かれていない。大宝元年より以前の木簡を見ると、どれも干支で記載されているのである。大化や白雉といった元号は、実際にはなかったものと考えざるを得ない。つまり、最初の元号は大宝なのである。

また、日本がなぜ元号を持ち得たのか。日本という国家が成立した時から元号を持ったわけであるが、これは唐に知られたらまずいことであった。天下の時間を支配

しているのは中国の皇帝であり、それを侵す者は皇帝への反逆と見なされたからである。

日本があえて元号を持ったのは、中国から離れているため、中国に知られずに済むだろうという読みもあったものであろうが、天皇が日本国を統合している象徴として時間を支配していることを知らせるためであった。

なお、独自の年号を持っている国家は、現在でも日本と中華民国(台湾)だけである。しかも、明治以降は一世一元号と定められたため、天皇の代わりごとに元号が変わることになる。時間の支配と天皇の治世とが密接に関連しているこの制度を、戦後以降も存続させ、法制化した人々の思いは、推して知るべきであらう。

現行皇室典範と現代の課題

先日、テレビ番組を見ていて驚いたのだが、「女性天皇」と「女系天皇」の区別もつかないコメンテーターがいた。男女平等の時代だから、天皇が女性でもいいではないかとよく言われるが、女性天皇と女系天皇とは、まったく意味が異なる。

現行の皇室典範では、皇位継承は父親が皇統に属する、いわゆる男系男子とすることが定められている。皇統譜によれば、天皇は今上天皇まで百二十五代を数え、その中で女性天皇は八十代いたが、すべて男系であり、女系天皇は一人もない。

一時はあれだけ女性天皇に関する論議が高まったのに、秋篠宮家に悠仁親王が生まれた途端に、どこかに消えてしまった。議論を主導していた人たちは、悠仁親王が即位する頃には自分は生きていないと思っているので、真剣な議論をしなくなったのであろうか。

このような風潮はよくない。悠仁親王が無事に即位まで成長するか、彼に相応しい妃が見つかるのか、見つかったとしても男子が生まれるのか、男の子を授かったとしてもうまく育つのか、など不確定要素が多いのであるから、きちんと議論をする必要があろう。

実は、律令制では女系天皇を想定していた。それを実現させるとなると、孝謙女帝と藤原仲麻呂を結婚させ、生まれた男子を皇太子とするというプランであったと思うのだが、それはついに実現しなかった。「皇室の伝統」を云々する人たちは、ちゃんと律令や古代史を学んでい

るのであろうか。

天皇は国民統合の象徴だというのならば、将来の天皇制について、政府は国民が納得するような対処をする必要があると思うのだが。

倉本 一宏（くらもと かずひろ）

国際日本文化研究センター教授、総合研究大学院大学教授、博士（文学、東京大学）。

一九五八年三重県津市生まれ。東京大学文学部国史学専修課程卒業、同大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学。専門は日本古代政治史、古記録学。著書に『一条天皇』（二〇〇三年）、『壬申の乱』（二〇〇七年、共に吉川弘文館）、『藤原道長の日常生活』（二〇一三年）、『戦争の日本古代史——好太王碑、白村江から刀伊の入寇まで』（二〇一七年、共に講談社）、『蘇我氏——古代豪族の興亡』（二〇一五年）、『藤原氏——権力中枢の一族』（二〇一七年、共に中央公論社）などがある。

15分で読む天皇の歴史・ブックガイド

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
大月書店	4272520855	近代天皇制国家の歴史的位置——普遍性と特殊性を読みとく視座	安田浩	3400	2011
御茶の水書房	4275010780	天皇制問題と日本精神史(菅孝行『天皇制論集』第一巻)	菅孝行	7800	2014
勁草書房	4326980277	転向と天皇制——日本共産主義運動の1930年代	伊藤晃	4200	2003
春秋社	4393107027	国家と天皇——天皇制イデオロギーとしての仏教	黒田俊雄編	2500	1987
筑摩書房	4480093486	米・百姓・天皇——日本史の虚像のゆくえ	網野善彦・石井進	1100	2011
	4480064172	象徴天皇制と皇位継承	笠原英彦	700	2008
	4480090997	象徴天皇という物語	赤坂憲雄	900	2007
東京大学出版会	4130230544	天皇・天皇制をよむ	歴史科学協議会編、木村茂光・山田朗監修	2800	2008
日本評論社	4535578753	議会・選挙・天皇制の憲法論	吉田善明	3107	1990
白水社	4560081938	鬼と天皇〔新装版〕	大和岩雄	2800	2012
平凡社	4582469103	神話と天皇	大山誠一	1900	2017
	4582842319	儀礼と権力 天皇の明治維新	ジョン・ブリー	3000	2011
	4582853728	天皇の日本史	武光誠	760	2007
法政大学出版局	4588364112	天皇と赤十字——日本の人道主義100年	オリヴァ・チェックランド(工藤教和訳)	3700	2002
みすず書房	4622083474	天皇制国家の支配原理	藤田省三	3000	2012
ミネルヴァ書房	4623074198	仁徳天皇——煙立つ民のかまどは賑ひにけり	若井敏明	2500	2015
	4623072927	後白河天皇——日本第一の大天狗	美川圭	2800	2015
	4623071814	孝謙・称徳天皇——出家しても政を行ふに豈障らず	勝浦令子	3500	2014
	4623070060	光厳天皇——をさまらぬ世のための身ぞうれはしき	深津睦夫	3200	2014
	4623057887	三条天皇——心にもあらでうき世に長らへば	倉本一宏	2800	2010
	4623057214	元明天皇・元正天皇——まさに今、都邑を建つべし	渡部育子	2800	2010
	4623055616	大正天皇——一躍五大洲を雄飛す	F・R・ディキンソン	2500	2009
	4623051236	後水尾天皇——千年の坂も踏みわけて	久保貴子	2800	2008
	4623047192	明治天皇——むら雲を吹く秋風にはれそめて	伊藤之雄	2800	2006
	4623046935	恒武天皇——当年の費えといえども後世の頼り	井上満郎	2600	2006

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
吉川弘文館	4642754446	最後の女帝 孝謙天皇	瀧浪貞子	2300	2017
	4642754835	天皇陵の近代史	外池昇	2300	2017
	4642058421	天皇の音楽史——古代・中世の帝王学	豊永聡美	1700	2017
	4642052801	天智天皇	森公章	2300	2016
	4642052764	継体天皇	篠川賢	2100	2016
	4642057592	古代天皇家の婚姻戦略	荒木敏夫	1700	2012
	4642052498	平城天皇	春名宏昭	2000	2009
	4642056663	持統女帝と皇位継承	倉本一宏	1700	2009
	4642052405	大正天皇	古川隆久	2000	2007
	4642052290	一条天皇	倉本一宏	1900	2003
	4642079228	歴代天皇・年号事典	米田雄介編	1900	2003
	4642055475	地獄を二度も見た天皇 光厳院	飯倉晴武	1700	2002
	4642051873	花園天皇	岩橋小弥太	1700	1990
	4642050852	桓武天皇	村尾次郎	2000	1987
	4642050791	後白河上皇	安田元久	1800	1986
	4642050098	持統天皇	直木孝次郎	2100	1985
中央公論新社	4122056312	天皇の影法師	猪瀬直樹	667	2012
	4121021052	昭和天皇——「理性の君主」の孤独	古川隆久	1000	2011
	4121018670	院政——もうひとつの天皇制	美川圭	820	2006
	4121009784	室町の王権——足利義満の王権篡奪計画	今谷明	760	1990
KADOKAWA	4046004048	歴代天皇125代総覧	『歴史読本』 編集部編	1000	2014
講談社	4065116401	天皇の歴史6 江戸時代の天皇	藤田覚	1180	2018
	4062924856	天皇の歴史5 天皇と天下人	藤井譲治	1160	2018
	4062924849	天皇の歴史4 天皇と中世の武家	河内祥輔・新田一郎	1210	2018
	4062924832	天皇の歴史3 天皇と摂政・関白	佐々木恵介	1180	2018
	4062924825	天皇の歴史2 聖武天皇と仏都平城京	吉川真司	1180	2018
	4062924818	天皇の歴史1 神話から歴史へ	大津透	1250	2017
	4065118511	天皇の歴史7 明治天皇の大日本帝国	西川誠	1230	2018
	4062921572	幕末の天皇	藤田覚	940	2013
	4062807401	天皇の歴史10 天皇と芸能	渡部泰明・阿部泰郎・鈴木健一・松澤克行	2600	2011
	4062807395	天皇の歴史09 天皇と宗教	小倉慈司・山口輝臣	2600	2011
	4062807388	天皇の歴史08 昭和天皇と戦争の世紀	加藤陽子	2600	2011
文藝春秋 岩波書店	4166611638	皇位継承〔増補改訂版〕	高橋紘・所功	880	2018
	4004311119	昭和天皇	原武史	740	2008
	4004305101	日本の誕生	吉田孝	660	1997
モラロジー研究所	4896391633	歴代天皇の実像	所功	1400	2009

3 度目の挑戦——未来をつなぐ書店に

石崎 久康（未来屋書店商品部MD編成グループ）

児童書売上日本一

「ショッピングセンターの中で店舗数が多いから当たり前」「品揃えに特徴はないし、どこの店でも同じものしか置いていない無個性の書店」

児童書の書店チェーン売上が最も多いのが未来屋書店であると知った方の反応は概ね同じです。もちろんオブラートに包んだ表現をしてはくれますが。

これらの意見全てが、つい最近まで私共には褒め言葉でした。金太郎飴書店と呼ばれることも誇りでした。

私が勤務する未来屋書店はイオンのグループ会社の書店です。全国の郊外型ショッピングセンター中心に約300店舗展開しています。

ここ数年の新規出店は、他書店同様に書店の新しい形態を模索してきました。文房具・雑貨の

拡大、カフェ導入、書籍と雑貨を合わせて棚を作る等です。私はその中でも書籍の棚の品揃えを構築する商品部MD編成グループという部署に所属しています。

一方で原点に戻って「書店らしい書店」を作ることに糸口を求め、2017年3月に500坪でイオンモールりんくう泉南店を出店しました。りんくう泉南店では人文書を約20本(140段)取り扱わせていただいています。

人文書に取り組むこと自体は初めてではありません。過去に失敗した、あるいは継続できなかったという印象をお持ちの方も多と思います。それなのに何故またと思われることも承知していますので、少し長くなりますが弊社の成り立ちから順に説明させていただきます。

一度目の取り組み——インショップ書店の展開

1985年に設立し旧社名でもあるブックバーンの屋号でロードサイドの複合店を展開していた頃は人文書とは無縁の書店でした。

1999年に未来屋書店屋号の1号店をショッピングセンター内に开店し、イオンがショッピングセンターの展開を拡大するのに伴い、それ以降インショップの書籍専門店へと形態を変換しました。

当時私は4号店だった250坪の成田店の店長でしたが、人文書は言うに及ばず、今まで扱っていなかった商品に囲まれ知らないことばかりでした。オープン時の品揃えは取次がしてく

れたのですが、それをどう管理していくかは現場に委ねられていました。成田店には書店経験者がいなかったため、教員免許を持っていれば教育書担当、大学時代に哲学を専攻していれば人文書担当、カタコトの英語が話せれば語学書担当、そんなノリで決めたパートタイマーさんたちと棚がどうあるべきか一緒に考えました。訪問してくれた版元営業の方に教わり、他書店の棚を見てきては真似をしての繰り返しでした。そうした店を全国各地に出店し、それぞれの店長、担当が他店舗との連携もなくもがいていたのです。

購入客の8割が女性、週末は来店客数も売上も平日の2〜3倍に跳ねあがり、そのほとんどが家族連れ。今までと真逆の客層に戸惑いしありませんでした。

インショップの出店が加速していきましたが、その多くは150坪前後でした。そのため品揃えを絞り込むという方向性が定まりました。児童書と婦人実用書をメインに据えた、ニューファミリー、それもお母さんと子どものための品揃えに特化したのです。

二度目の取り組み——金太郎飴書店の拡大

2005年頃からショッピングセンターがより大型化した所謂ショッピングモールが急増します。その中に出店するテナントにもより大型化が求められて、弊社も300坪を超える出店が相次ぎました。

当時の私は商品部にいて、新刊や平積商品の発注の本部一元化、棚の自社定番化を進めていました。地域性の違いを考慮するよりも、客層の類似点を重視した単品発注、棚定番作成のほうが

売上効果も大きかったからです。同じ商品構成、同じ品揃えの金太郎飴書店の誕生です。それに合わせて店舗にいる社員の役割は安定した売場を維持することがほぼ全てとなり、商品をさわることから遠ざかっていきました。

大型店出店にあたり人文書を含めた専門書を拡大していくことになりましたが、そういう状況下では自社定番を作り本部管理することが前提でした。定番化・自動発注化は進み、人文書も同様の形で稼働するようになりました。

その後も本部一元化を進め、どのジャンルも一律に売上ベースで管理するようになった結果、人文書の品揃えは中身の進化も在庫の充実もなく、担当者を育成することもせず、放置してしまいました。実際にその頃オープン時に人文書の自社定番を導入し、10年たった今も当時の状態のまま残っている店があります。一つのやり方にこだわるあまり、ジャンル特性を無視してきたからだと思っています。恥ずかしく、また悔しく思っています。

三度目の取り組み——読書の入口から未来をつなぐ書店へ

この10年間で一番の変化は来店されるお客様の男女比、年齢層が幅広くなったことかもしれません。ニューファミリー層に特化とは言えなくなり、全店一律の品揃えも通用しなくなってきました。2016年から2017年にかけて、全店のビジネス書の棚本数を増やし在庫金額を2〜3倍にする取り組みをしました。小型店では効果が出なかった店もありましたが、ビジネス書が売れないとされていた女性客比率が高いお店でも売上が上がりました。「お父さん」が週末

に家族と一緒に来店される際は仕事の本を買わない、という10年前に分析した結果に固執していたことに気づかされました。

また近隣書店が減少し、気がつけば地域一番店になっていた店もあり、総合的な品揃えの要望が年々高まってきています。

冒頭で述べたように、弊社は10年以上児童書に力を入れてきました。それは子どもたちにとって読書の入口であり続けてきたということだと思っています。当初は親と一緒に来店されるのは小学校の低学年まででしたが最近では中学生でも珍しくなくなり、中学・高校になると友達とも来店されるようになります。

極端な話、未来屋書店しか書店を知らないまま高校生になった子どもたちが増えているのです。今まではもっと本が揃っている他の書店に行くという選択肢がありました。でも今はネットで買うしかない地域が増えています。

読書傾向が固まっていればネットで本を探すのはたやすいと思いますし、地域や学校の図書館の蔵書が充実しているならばそれで事足りるでしょう。でもそうでなければ本との出会いは書店の品揃えに左右されてしまいます。

りんくう泉南店以降、専門書に力を入れた新店を作り、既存の店の品揃えも変え始めています。ですが児童書から専門書までを一つの思想で貫く形にはまだなっていません。地域に元々いた人文書好きな方に喜んでいただく売場づくり以上に、未来屋書店しか書店を知らずに成長されたお客様が人文書に出会える売場を作っていきたい。読書の入口で終わらず、児童書から文芸書や人文書へと、読書の成長に寄り添っていく書店になりたいのです。



筆者近影

専門書の取り組みは自力だけでは困難と判断し、2017年、商品部や店舗に他書店の経験者の採用をしました。商品部には書原霞が関店の店長だった牛久保力生氏が加わり、りんくう泉南店以降の人文書の品揃えを担うとともに、店舗を巡回して担当者教育をしてもらっています。マネジメントだけやってきた社員が自ら本をさわる書店員に戻れと言われ、困惑しているだけの者もいるのが現状です。書店員を育成しながら、新しい仕組みを作り支援していくのがこれからの本部の役割です。そのためにすべきことを生粋の書店員である牛久保から学んでいるところです。

未来屋書店はこうした新たな思いで人文書に取り組み始めたばかりです。三度目ではありますが、意味合いは大きく異なります。人文書に関わる皆様にご尽力いただけたら嬉しいのです。よろしくお願いいたします。

石崎 久康（いしざき ひさやす）

公共図書館と「出版」——千代田図書館10年の取り組みから

河合 郁子（元・千代田区立千代田図書館企画チーフ）

1 人文会と千代田図書館

遡ることちょうど10年前、2009年の連続セミナー「本を選ぶときのポイント——出版社を知り出版社で選ぶ」から、千代田図書館と人文会のご縁が始まりました。千代田図書館を会場に、人文会会員社から講師を招き、各社の歴史や特色について裏話を交えてお話いただく、6回連続型の講座です（写真1）。まだ公共図書館と出版社が連携してイベントを行った事例がほとんどなかった頃で、このようなテーマで集客できるのか一抹の不安を感じながらも、「メーカーと顧客という両者の関係から一歩踏みだして、ともに読書機会のインフラを担うもの

として協働の取り組みはできないだろうか*」という、双方の思いから生まれた企画でした。

果たして、連続セミナーは小さな会場ながらもすべての回が満員御礼となり、参加者からは「本に対して敬意が生じた」「編集者にも注目しようと思った」「めったに聞けない裏側のエピソードが面白かった」などの感想を多数いただけたのでした。安堵とともに手応えを感じた私たちは、続けて「人文書のすすめ——じっくり読みたい300冊を集めました」という企画展示を開催しました。当時の会員社19社がそれぞれ「推薦する自社の一冊」を選び、書影と紹介文を大型パネルに仕上げて展示し、パネルの下では図書館が所蔵する会員社の書籍を約300冊並べて貸出しました（写真2）。本の紹介文



写真1 連続セミナー各回の講師に再登壇していただいた番外編の様子



写真2 「人文書のすすめ」展示

は各社の編集者に書いていただき、パネルに描いた紹介者の似顔絵は親近感を感じられると好評をいただき、パネルで紹介した本はもちろんのこと、300冊の既刊の人文書も多数貸出されました。この人文会とのセミナー・展示を皮切りにして、千代田図書館では出版社と連携した企画が軌道に乗り始めました。

* 橋元博樹氏「はじめに」(「人文会ニュース」108号、2010年5月)より。連続セミナーについては、「人文会ニュース」108号(人文会連続セミナーin千代田図書館特集号)ならびに拙稿「本を選ぶときのポイント」(同106号、2009年9月)をご参照ください。

2 千代田図書館を取り巻く状況

そもそも、千代田図書館がなぜ出版社と連携事業を始めたのか、その背景には千代田区ならではの事情がありました。千代田区は、住民数はわずかに6万人、昼と夜の人口差が全国で一番大きい、とても特殊な自治体です。人口規模が小さく、スペースの確保が難しい土地柄のため、図書館は蔵書も施設も大きくありません。一方で、

大学図書館やミュージアム、史跡など情報の集積地が区内に多数存在しますし、図書館が扱うべき情報は「本の形をしているもの」だけではありません。

そこで、2007年の移転リニューアルを機に、千代田図書館は貸出などの従来のサービスに加えて、「展示やイベントなど、貸出以外の多様なコンテンツを提供して利用者層を拡大する」「図書館の外にある情報も積極的に案内する」「昼間区民であるビジネスパーソンへのサービスを意識する」などをコンセプトに掲げ、新たに企画部門や広報・コンシェルジュ部門を設けることになりました。

特に、千代田区は出版社や編集プロダクション、書店、取次などが多く、千代田図書館から徒歩10分のところに古書の街・神保町があるので、本をつくるところから流通までの全体としての「出版」を地域の産業と捉えることにし、積極的に情報収集、提供してきています。例えば「出版にまつわる本棚」というコーナーを設け、出版クラブ、エディタースクール、彌吉光長氏、美作太郎氏らの旧蔵資料を軸として、出版の歴史や流れがわかる資料を1か所に集めています。特に社史・業界団体史が充

実していることから、出版史や出版業を主題として執筆する方々に重宝されています。

その他、この10年間に千代田図書館は出版に関連する様々な事業に取り組んできました。本稿ではその中から、「出版社との連携展示」「情報交換会」「出版関連コレクションの活用」について、経緯を含めてご紹介します。

3 出版社との連携展示

千代田図書館の企画部門では、外部組織との連携という手法を積極に用いており、ミュージアムや専門図書館などとの展示・イベントを行っていました。図書館にとっては、テキストや図版用のデータを提供していただけることが、パネル制作においてとても重要で、連携展示を行うにあたって図書館側の最大のメリットになっています。そこへ前述のように、出版社という新たな連携先が加わり、展示のバリエーションがいつそう広がっていききました。

「人文書のすすめ」展を通して、図書館と出版社の協働による「本と読者の出会いの場」づくりの手応えを感

じていただけたのでしょうか。会員社である法政大学出版局から「もうすぐ『ものと人間の文化史』が150タイトル目を発刊するので紹介展示をしたい」と声をかけていただきました。千代田図書館を利用する多くのビジネスパーソンにも、民俗学をテーマにしたシリーズに関心を持ってもらいたいと考え、切り口の設定に悩み、同社の古川真氏と何度も相談しながら企画を練りました。翌2010年『ものと人間の文化史』150タイトル展——暮らしの『もの』に込められた記憶から現代ビジネスのヒントを探る——を実施。この頃から、展示期間中に図書館で関連するテーマの講演会などを開催し、また区内の新书書店で連動フェアを開催していただくというパターンが形成されていきました。

そうこうするうちに、人文会や法政大学出版局との展示をご覧になった出版社から、「わが社も図書館で展示をしたい」と声をかけていただけるようになりました。「平凡社創業100周年『別冊太陽』展——日本の文化を創った100人——10分で出会う吉本隆明展——晶文社『吉本隆明全集』によせて」ほか、日経BP社、勉強出版、アジアの本の会、ディスカヴァー・トゥエン

ティワン、ビジネス書大賞実行委員会、彩流社、読書人、新典社、新幹社、Gakken、図書新聞、交通新聞社、東洋経済新報社、実業之日本社、読書推進運動協議会、毎日新聞社、河出書房新社、集英社など、この10年間でたくさんの出版社や関連団体と一緒に展示をして、多くの図書館利用者に向けて「本との出会いの場」をつくることができました。

展示を実施したら、来場者アンケートと貸出統計で効果測定を行います。図書館にとっては「楽しい展示だった」「新しい発見があった」「本を読みたくなった」という声を得られたり、貸出が増えたりすれば、展示は成功です。一方で連携した出版社にとって、どのようなメリットがあるでしょう。例えば、平凡社の『別冊太陽』展の際には、「別冊太陽を今回初めて知り、興味を持った」という声が複数あつて、シリーズ認知度向上の機会になったことがわかります。また、別冊太陽だけでなく、平凡社の他の本への期待や要望、励ましなど、個々の読者の声を得ることができるところが、連携先の好評を得ています。貸出統計では、年代・性別の貸出数から、30代と60代では利用者の性比が逆転していることなどがわ

かりました。このような情報は、これまで得る機会がなかったもので参考になると出版社に喜ばれています。

4 出版社との情報交換会

「出版社×千代田図書館 情報交換会」は、2010年から始まりました。2018年3月に開催した第14回には、出版界から55名、図書館界から64名の参加があり、『新聞之新聞』『新文化』『文化通信』『全国書店新聞』など複数の業界紙に取り上げられるなど、多方面の関心を集め、好評をいただきました(写真3)。しかし、情報交換会は初回から順調だったわけではありません。

初期には、「図書館の所蔵する貴重資料が、出版の企画や図版探しに役立つのではないか」と考えて、編集者向けにコレクションの概要紹介を行ったりしましたが、反応は鈍いものでした。次に、「出版社連携展示が出版社からも利用者からも好評なので、もっと多くの出版社に連携展示のを知っていただき、次の連携先を見つければ」と考えました。展示の案内だけでは、会場に足を運んでいただけないだろうと思われたので、営業担当



写真3 「出版社×千代田図書館 情報交換会」の様子(2018年3月)
 パネリスト(所属・役職はイベント当時のもの)
 〈出版社側〉文藝春秋 松井清人社長、原書房 成瀬雅人社長(コーディネータ)
 〈図書館側〉新宿区立中央図書館 萬谷ひとみ氏、白河市立図書館 新出氏、
 千代田図書館 恒松みどり氏

者向けにベストセラー史をテーマにした講演会や「図書館に本を売るには」と題して選書の実情解説などをセットで開催したことで、参加者が徐々に増えていき、あわせて連携展示の企画も次々にお声がけいただけるようになりました。

参加してくださった出版社の方々と意見交換していく中で、私たち図書館員が出版界の事情をいかに知らないかを痛感することが多く、一方で出版社の方からの質問に「図書館のサービスが認知されていないんだな」と感じることもしばしばありました。また、出版界からは「貸出猶予」「公共図書館は本の敵か？」など、新たな問題提起もありました。そこで2015年から、「お互いのことをもっと知ろう」という趣旨で、図書館界と出版業界の両方からパネリストを招いてシンポジウム形式で開催するようになりました。

・「出版業界にとって公共図書館が良くなったと感じるところと、これから改善して欲しいところ」(2015年)

・「『貸出猶予』問題について見直し、図書館と出版社の協働のあり方を考える」(2016年)

・「出版社の情報提供と図書館司書の情報収集はマッチしているのか」(2017年)

・「図書館における文庫貸出を考える」(2018年)

出版社と図書館が、同じテーブルで一緒に意見交換する公開イベントというのは、これまでにほとんどない企画でした。出版界からの参加者はもちろんのこと、図書館界からの出席者も次第に増えていき、双方の関心が高まっていることを実感しています。回を重ねるごとに相互理解とテーマは深まっています。「出版社だけでなく、取次、新刊書店の方々と一緒に考えていかなくては」「次は、読者・図書館利用者も巻き込んで、出版文化の存続を考えていきたい」など、今後も議論と情報交換を続けていきたいとの声を、登壇者からも参加者からもいただいています。

5 出版関連コレクションの活用

千代田図書館には3つの特別コレクションがあり、いずれも出版に関連するもので「出版関連コレクション」とも呼ばれています。「内務省委託本」は、戦前に

内務省が行っていた出版物の検閲で実際に使用された正本(発禁処分にならなかったもの)で、検閲の実態を読み取ることができることから、出版史において貴重な資料と言われています。「一橋・駿河台図書館業務資料」は、千代田図書館の前身である東京市立一橋図書館・駿河台図書館時代の業務日誌や閲覧料の日計簿などです。日本の図書館史研究および出版文化史研究において、大変重要なものと言われています。「古書販売目録」は、古書店が通信販売を行うために発行するカタログで、出版文化史や書誌学を研究する上で重要な意味を持つてくる資料と言われています。

これら3つの特別コレクションについては、冊子体目録やデータベース検索、またデジタル画像のweb公開など、利用環境の整備を行いました。ただ、いずれも専門的な資料で、一般的な区立図書館ユーザーが利用するタイプのものではありません。データベースが使えるようになったり、画像が見られるようになったとしても、利用に至ることはほぼないのです。そこで千代田図書館は、まず研究者と連携して、コレクションの調査・研究を進めることにしました。次に、その研究成果をわかり

やすく加工して、一般向け企画展示や講演会を開催し、さらに展示の記録や講演録を作成して、それらをデジタルでアーカイブするという形で、段階を踏んだ活用・利用促進を行っています。

活用の第一段階は、研究者による活用です。「内務省委託本」「二橋・駿河台図書館業務資料」で、研究会が動いており、関心のある研究者の方々が集まって、研究成果を発表したり、意見交換したりしています。図書館の所蔵資料を使って研究者が調査研究したり、学会で発表したり論文を書いたりすること自体は珍しいことではありませんが、多くの場合、研究者と図書館の関係は、資料を閲覧・撮影するときのみで、図書館はその研究成果を把握しません。一方、千代田図書館では、特別コレクションについて、その研究成果を図書館が共有できるようなしくみの一つとして研究会が設けられていて、図書館が事務局を務めているのが特徴です。

さて、研究者による活用が進んだら、その成果を4つの形に加工して、一般向けに発信していきます。①研究会での発表から一般の方々が親しみやすいトピックを選んで、わかりやすくかみ砕いて、レポートを作成。図書

館内で配布するほか、図書館の公式webサイトにてダウンロードできるようにしています。②研究の成果がストックされてくると、テーマを決めて展示を企画。ほぼ毎年、どれかのコレクションの紹介展示を開催しており、研究会が全面的に協力してくださいます。普段は閉架書庫の中にあるため目につくことのない特別コレクションの存在を、図書館利用者や区民に知ってもらう大切な機会です。③研究会のメンバーによる講演会。展示やレポートよりも詳しい話を聞けるため、一般の方々はもちろんですが、学術的にも評価が高く研究者の参加も多いのが特徴です。④展示パネルの内容をまとめたパンフレットや資料集などを発行し、館内で配布するほかインターネットで公開(写真4)。展示や講演会は一時的なものです。パンフレットやレポートはいつでもアクセスできる日常的なものとして位置付けられています。

コレクション紹介展示の開催時には、これら4つの手法をすべて使います。2017年の「検閲官——戦前の出版検閲を担った人々の仕事と横顔」展では、パネル展示、資料のケース展示、講演会、レポートやパンフレットの配布を行い、持ち帰られた配布物は6500



写真4 コレクション関連の発行物



写真5 「検閲官」展示

部、新聞等には8回掲載され、たくさんの方が展示を見に来られ、大きな話題となりました。この展示を見た出版社から、研究会メンバーのところへ、検閲官をテーマとした書籍の執筆の打診が来たほか、NHKから特集番組の制作を視野にいれた取材が入るなど、今後の進展が期待されています。

コレクション活用は協力してくださる研究者あつての活動なので、研究者がスムーズに調査研究できるように、特別に閉架書庫の中で閲覧・撮影できる環境を整えています。また事務局機能として、研究会の日程調整から始まり、研究のペースメイク、取材が入ったときの広報対応、他の図書館などが所蔵する資料を調査したい場合の調整なども行い、ときには調査に同行して作業を手伝うこともあります。図書館での展示やレポートの発行などの際には、執筆者や協力者として名前が出ますので、研究実績にもなるとして若手の研究者にメリットと受け止めていただいています。研究者に限りませんが、外部との連携を継続していくために、ウィンウィンの関係をつくれるように図書館は何を提供できるか、を常に意識してきました。

6 これからの公共図書館と「出版」

2017年10月、「書物復権の会」主催のパネルディスカッション「変化する図書館と〈出版〉」でパネリストとして登壇の機会がありました。そこで特別コレクションの活用について報告したところ、同じくパネリストとして登壇されていた持谷寿夫氏（みず書房前社長）に「千代田図書館のやっていることは、まさに『出版』ですね」と言われて、ハッとしました。また、持谷氏が打ち合わせの際におっしゃっていた『『出版の危機』と言われていているけれど、デジタル技術の進展やインターネットの普及により『出版』自体は広がっている。一方で、従来からの『出版業』は揺らいでいる」という言葉がとても印象に残りました。

たしかに、お年寄りから町の歴史を聞き取って報告書を発行したり、お祭りの様子をビデオで撮影・編集しVHSやDVDなどの形で配布したり保存している図書館は以前からあり、それらはごく小規模な「出版」として認識していました。一方、近年、デジタルアーカイ

プや展示の記録・講演録などをwebで公開することは、利用者の利便性向上や広報の延長上として捉えていたのですが、これもまた新しい形での「出版」だったのだと。

これまで、図書館は出版社や団体・個人が供給する情報を書物という媒体を中心に、収集してきました。いま、媒体が変化し、大きな供給元である出版社が転換期を迎えている中で、思いがけず図書館自体が供給元としての存在を増していることに、気づいたのです。つまり、図書館は「出版物」を未来へ渡すために生まれ、近年「出版業界」と連携を深めてきたが、これからは「出版」とどのように関わっていくのか、という新しい視点が加わった、と言えるでしょう。例えば、商業ベースに乗せにくい情報を媒体に入れこんで、世の中に送り出すとともに保存する。図書館にそのような働きがますます求められていくのかもしれない。

図書館の本質的な使命は、「未来の利用者」のための情報の収集・保存・提供にあると、私は考えます。未来というのは、1時間後、5年後、50年後も、全部が未来です。明日の利用者が求める情報（資料）と、50年後の利用者が求める情報（資料）は異なることも多いけれど、ど

ちらも大切な図書館利用者です。両方の求めに応えられるように、苦心して選書していくのが司書の重要な仕事の一つです。

片や「図書館を利用する」という観点から考えてみると、公共図書館の利用登録率（全国平均）は3割に達しておらず、住民のうち7割以上は、図書館の資料を利用（＝貸出）していないのに、運営費は負担しています。もはや「3割弱の利用者のための図書館」では、税金の使い道として、社会全体の理解・納得を得ることが難しくなりました。そこで、7割の人たちにも様々なかたちで図書館の資料や空間を利用していただけるようにして図書館ユーザーを増やし、また直接利用しない人にも「私は本を読まないけれど、自分の暮らす町に図書館があるといいね、税金を使う価値がある」と感じてもらえる図書館をつくる必要性がますます高まっています。

そのような社会の変化の中で、公共図書館はどのように変化して、使命を果たすのか。明日の市民にも50年後の市民にも「図書館があって良かった」と思っていたいただけることを目指して、私たち図書館員は悩みながらも、想定し決断し、図書館をつくっていくしかありません。

図書館を取り巻く状況は大きな変化の中にありますが、これまでも、これからも、図書館にとって出版社や書店は、知を生み出しインフラを整備する大切なパートナーの一人です。目的が共通ならば、バラバラに動くよりも協働する方が効率がいいはず。その連携事業を生み出す力と企画のヒントは、お互いをもっと知ることから生まれるのだと、10年間を振り返って改めて感じています。

7 最後に

私自身は、昨年度末で千代田図書館を退職し、今年度からは石川県立図書館の新館建設準備と運営に携わることになりました。この10年間、人文会の皆様をはじめ、多くの出版社・書店・研究者の方々に大変お世話になり、たくさん勉強させていただきましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。これまでの学びと経験を活かし、石川県の方々の文化的な活動の舞台として知的な活気と賑わいにあふれる図書館をつくっていききたいと思いますので、今後ともよろしくお願い致します。

末尾になりましたが、連続セミナーの人文会側のまと

め役を担当してくださった橋元博樹氏（東京大学出版会営業局長）、情報交換会に多大なご尽力をくださった成瀬雅人氏（原書房社長）、元編集者の経験と人脈を活かして千代田図書館の出版関連事業を発展させてきた幸田徳子氏（元・千代田図書館企画システムプロデューサー）に改めて感謝の意を表しつつ、これからも図書館と出版業界の相互理解や連携事業が進展していくことを心より祈念しています。

広報委員会

委員長 岩野忠昭

広報委員会の活動の柱は『人文会ニュース』の刊行とウェブサイトの運営です。

『人文会ニュース』は例年ですと年3回の発行(8月、12月、4月)ですが、今期は人文会創立50周年の節目にあたり、『人文書のすすめ 人文会創立50周年記念誌』をこの夏に発行予定です。その作業に注力するために前期の最後、4月に発行予定であった『人文会ニュース』の発行をとりやめました。今期は予定どおり、8月、12月、4月の年3回の発行を目指します。

同誌の主たるコンテンツ、「15分で読む」「書店現場から」「図書館レポート」は、お陰様で書店・図書館の方から好評をいただいております、今期も充実した内容を揃えることを目指します。人文会の活動を広く知らせるという役割を踏まえつつ、書店や図書館の人文書担当の方に少しでも興味を持っていただけるような、そして日常の業務に役に立つようなコンテンツを提供していきたいと考えています。

人文会ウェブサイト(<http://www.jinbunkai.com/>)は、人文会と会員各社の情報提供の場としてこれまで以上に内容の充実を目指します。役に立つ情報をスピーディーに発信することを目標に、まだまだ改善の余地が残っていますので、皆さまのご批正をお願いする次第です。

紙媒体とウェブ媒体というそれぞれの特性を活かし、また補完し合いながら、人文会と人文書の普及、発展を目指したいと考えていますので、今期もよろしくお願いいたします。

委員長 岩野忠昭(白水社)

佐藤信治(大月書店)

副委員長 乙子 智(慶應義塾大学出版会)

吉岡 聡(春秋社)

須藤 圭(ミネルヴァ書房)

調査・研修委員会

委員長 水口大介

出版業界が大きな変革の波にさらされている中で、人文書を「読者」のもとへ届けるために何が必要なのかを会員社内で、また関係各所とともに考え続ける。それがわれわれ調査・研修委員会の主要なテーマです。

今期も以前より行ってきた書店様・取次様・図書館様との研修会を引き続き行っていきます。前期は図書館に関連する研修会を複数回実施し、現場の方々の意見を聞くことで、最新の図書館事情について知識を深めることができました。こういった研修会を通じて最新の知識を蓄えることにより「いま」に対応していきたいと思っています。

ここ数年、今までの書籍販売を支えてきたシステムに大きな変化が見え始めていますが、この1年くらいの変化のスピードは想定以上です。個々の出版社の知識や経験では対応しきれない事態が次々と起こっています。そんな中で会員社の判断に役立つような機会を提供することも我々の重要な役割だと考えています。通常の活動や適宜開催する研修会を通じて出版社団体としての力を蓄えていきたいと思います。

今期もどうぞよろしくお願いいたします。

委員長 水口大介(創元社)

西野浩文(勁草書房)

副委員長 片山伸治(吉川弘文館)

藤井若菜彦(筑摩書房)

委員会活動方針

販売・企画委員会

委員長 朝倉哲哉

人文会設立50周年と節目の年となる今期、販売・企画委員会は先期から1名増員の7名体制となりました。今期の委員会施策の中心に「人文会50周年フェア」の開催があります。増員には書店様へのフェア打診と、開催実現の際はご担当者様と綿密なやりとりを継続させることによって成功させる、という意味が込められていると考えております。一連のフェアが終了したときに、満足な結果であったと思えるよう、委員全員で一丸となって取り組んでまいります。

先期、新企画として作成しました外商様向け販売促進用資料「高校生のためのブックガイド」ですが、すでに今期分を作成いたしました。デザインは前作を踏襲し、掲載書目を入れ替える形としましたが、制作部数の大半を多くの書店様に配布しております。外商様だけではなく、店頭フェアでも活用いただけるアイテムとして、広くご案内してまいります。

個々の施策に関しては先期同様取り組んでまいります。市場の動向には常に目と耳を傾け、必要と思えるものに関しては、迅速に施策として取り組める委員会にしていきたいと思っております。そのためには書店様・取次様との情報共有が不可欠です。様々な場面でお世話になるかと存じますが、今期もよろしくお願い申し上げます。

委員長 朝倉哲哉(法政大学出版局)

副委員長 森 卓巳(青土社)

志田則幸(紀伊國屋書店)

澤畑 壘(東京大学出版会)

五月女公(日本評論社)

登尾純一(平凡社)

水谷幹夫(未来社)

☆3月例会

期日：2018/3/22 15:00～17:00

場所：春秋社 会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

☆4月例会

期日：2018/4/18 15:00～17:00

場所：筑摩書房 4F会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

□来会 16:30～17:00

株式会社今井書店 取締役 常務執行役員 古泉淳夫氏「高校生向けカタログ・学校巡回」の継続実施について

[敬称略]

以上

☆1月例会

期日：2017/1/17 15:00～17:30

場所：筑摩書房 4F会議室

出席者変更：吉川弘文館(片山→吉原)

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

□来会 16:30～17:00

日本出版販売株式会社 平井宏樹氏(マーケティング本部 課長)・浅香健氏(マーケティング本部 係長)・和田陽氏(マーケティング本部 係長)「販売施策リリースフェースについて」

○人文図書目録刊行会編集会議

期日：2018/1/26 15:00～17:00

場所：トーハン本社 7F会議室

事務局：トーハン 大久真樹氏

参加者：代表幹事(田崎)／哲学・思想(水谷・朝倉・片桐)／心理(水口・奥村・五月女)／社会(平石・西野・須藤)

☆2月例会

期日：2018/2/21 15:00～17:00

場所：筑摩書房 4F会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

□来会 15:00～15:20

株式会社三省堂書店 理事 企画事業部部長兼メディア事業部室長 香取浩一郎氏・比嘉栄氏(企画事業部 課長)・山口奈美子氏(企画事業部)「三省堂書店オンデマンドの説明」

○日本出版販売株式会社 図書館営業部・選書センター見学・研修会

期日：2018/3/12 15:00～17:00

場所：図書館選書センター

日本出版販売株式会社 渡邊真嗣氏(選書センター長)の業務説明後、コンシェルジュの皆様のご案内でセンターを見学。

(参加者：19社28名)

○図書館総合展 人文会ブース展示

期日：2017/11/7～11/9

会場：パシフィコ横浜

11/8 丸善雄松堂株式会社 山崎清宏氏(ライブラリー営業推進部 部長)・小野智生氏(和書企画グループ グループ長)との勉強会開催。株式会社図書館流通センターブース内にて会員社編集者登壇、吉川弘文館(堤崇志氏)、白水社(藤浪健氏)

○三省堂書店神保町本店フェア

期日：2017/11/7～2018/1/8

担当：法政大学出版局(朝倉)・青土社(森)

フェア連動講演会 12/21「川添愛先生(『自動人形の城』東京大学出版会刊行)」

☆11月例会

期日：2017/11/15 14:00～16:45

場所：トーハン本社8階 大会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. 秋季研修旅行総括
4. その他 情報交換

□来会 14:00～14:30

株式会社トゥ・ディファクト 森山竜一郎氏(ハイブリッド書店通販プロダクト部部长)、高橋亜悠子氏(同部 リーダー)、大日本印刷株式会社 石亀尚郎氏(hontoビジネス本部 ハイブリッドチャネル流通ユニット HBSRC企画開発部 副部长)、野地哲平氏(HBSRC企画開発部第1グループ)、株式会社丸善ジュンク堂書店 市木誉世夫(営業本部仕入販売部 主任)「新刊事前予約について」

☆12月例会

期日：2017/12/22 15:00～17:00

場所：筑摩書房 4F会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

□来会 15:00～15:30

株式会社紀伊國屋書店 太田黒弘昭氏(営業総本部ICT営業本部・本部長)・梁瀬裕子氏(課長代理) 学術電子図書館「KinoDen」の説明

○人文会ニュースNo128号刊行

2017/12/25 発行

○アマゾンKindle研修会

期日：2017/7/28 15:30～17:30

場所：文化信用会議室

講師：アマゾンジャパン合同会社 石川響一氏(kindleコンテンツ事業部 ペンダーマネージャー)

(参加者：17社24名)

☆8月幹事会

・期日：2017/8/18

・場所：白水社会議室

例会中止(夏期休暇のため都合が合わず)幹事会のみ開催

○人文会ニュースNo127号刊行

2017/8/25 発行

○8/18「高校生のためのブックガイド2017」発行

担当：創元社(水口)・東京大学出版会(澤畑)

☆9月例会

期日：2017/9/20 15:00～17:00

場所：筑摩書房 4F会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. 秋季研修旅行説明
4. その他 情報交換

□来会 16:20～16:50

株式会社ブックファースト 取締役 梶野光弘氏・取締役 嶽山義治氏・守田一雄氏
(東京地区エリアマネージャー)・塚本忍氏(中野店店長)「中野店開店の説明」

○2017年人文会秋季研修旅行

期日：2017/10/18～10/20

方面：札幌・八戸・仙台

販売会社同行：株式会社トーハン 今祐介氏(書籍部アシスタントマネージャー) / 日本出版販売株式会社 浅香健氏(マーケティング本部 係長) / 株式会社大阪屋栗田 坂野上正臣氏(MD本部仕入企画部 次長)

旅行幹事：青土社(森)・春秋社(吉岡)

10/18 研修会：札幌南図書館 成田康子先生による「高校の図書館をつくる」(参加者22名)

桐)・御茶の水書房(平石)・東京大学出版会(澤畑)・みすず書房(田崎)
・7/5～7/7 南九州(宮崎・鹿児島・熊本)グループ：◎ミネルヴァ書房(須藤)・○紀
伊國屋書店(志田)・青土社(森)・大月書店(佐藤)・春秋社(吉岡)
(◎班長 ○副班長)

○笠原書店専門書フェア

期日：2017/5/9～6/17

場所：笠原書店本店1階レジ前 担当：青土社(森)

○三省堂書店名古屋本店フェア

期日：2017/4/17～5/31

担当：法政大学出版局(朝倉)

○三省堂書店札幌店フェア

期日：2017/5/8～7/17

担当：晶文社(片桐)

☆7月例会

期日：2017/7/19 16:00～17:45

場所：出版クラブ

1. 代表幹事・幹事会より
2. 各委員会活動方針
3. 特約店グループ訪問報告
4. 秋の研修について青土社(森)・春秋社(吉岡)
5. Amazonのバックオーダー中止に関して

○新保さんに感謝する会

期日：2017/7/19 18:10～20:10

場所：出版クラブ

法経会・歴史書懇話会・国語・国文学出版会・大学出版部協会・心理学書販売研究会・
仏教書総目録刊行会の代表者、歴代代表幹事、新文化通信社、また、人文会OB、正担当
者・サブ担当者が参加(53名)。

○人文会、大学出版部協会合同勉強会

Amazonバックオーダー中止問題を契機に専門書版元が考えるべきこと

講師：株式会社語研 取締役営業部長 高島利行氏

期日：2017/7/10 18:00～20:00

場所：東京電機大学神田校舎(42名)

委員会の構成メンバーを選考。

以下の人事を決定。

9 2017年度の役員および各委員会メンバーの発表

- ・代表幹事 田崎洋幸(みすず書房)
- ・会計幹事 平石 修(御茶の水書房)
- ・書記幹事 片桐幹夫(晶文社)
- ・販売・企画委員会 ◎朝倉 哲哉(法政大学出版局) ○水谷 幹夫(未来社)・奥村友彦(誠信書房)・森 卓巳(青土社)・志田 則幸(紀伊國屋書店)・澤畑 壘(東京大学出版会)
- ・調査・研修委員会 ◎水口 大介(創元社) ○片山 伸治(吉川弘文館)・西野 浩文(勤草書房)・藤井 若菜彦(筑摩書房)・五月女 公(日本評論社)
- ・広報委員会 ◎岩野 忠昭(白水社) ○乙子 智(慶應大学出版会)・須藤 圭(ミネルヴァ書房)・佐藤 信治(大月書店)・吉岡 聡(春秋社)

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

10 三役と各委員長挨拶

11 退任者挨拶 新保卓夫(誠信書房)・橋元博樹(東京大学出版会)

17:00 終了

総会幹事: 乙子(慶應義塾大学出版会)・志田(紀伊國屋書店)

懇親会 出版クラブ 17:30～20:30

☆6月例会

期日: 2017/6/20 15:00～17:00

場所: 筑摩書房 4F会議室

出席者変更: 筑摩書房

1. 代表幹事・幹事会より
2. 各委員会活動方針
3. 特約店グループ訪問進行状況確認
4. 情報交換

○特約店グループ訪問

- ・6/28～6/30 北九州(大分・小倉・下関・福岡)グループ: ◎法政大学出版局(朝倉)・○吉川弘文館(片山)・筑摩書房(藤井)・慶應義塾大学出版会(乙子)・日本評論社(五月女)
- ・6/28～6/30 東海(愛知・岐阜・三重)グループ: ◎誠信書房(奥村)・○勤草書房(西野)・創元社(水口)・白水社(岩野)
- ・6/28～6/30 近畿・山陽(大阪・兵庫・岡山)グループ: ◎未来社(水谷)・○晶文社(片

2017年度(2017.5～2018.4)人文会活動報告(全般)

書記幹事 片桐幹夫

☆第51回(2017年度)人文会総会

期日：2017/5/19

場所：日本出版クラブ

出席者：正担当者19名 担当者変更2社・1名 計21名

14:00開始

総会の開催

1 代表幹事挨拶

2 総会議長選出

* 総会議長は慣例に従い前年度の書記幹事(新保)が務める。

3 2016年度活動報告

ア) 会活動全般 (書記：新保)

イ) 会計報告 (会計：平石)

4 2016年度各委員会活動報告

ア) 販売・企画委員会 (委員長：朝倉)

イ) 調査・研修委員会 (委員長：橋元)

ウ) 広報委員会 (委員長：岩野)

5 会則の改廃

* 今回は変更の申請なし

6 休会・入会の承認・報告

・休会の報告：平凡社

7 担当者変更会員社の紹介 誠信書房(新保→奥村) 東京大学出版会(橋元→澤畑)

8 役員の改選及び各委員会構成について

ア) 代表幹事選出

議長より田崎氏を推挙。全会員賛同にて田崎代表幹事留任を決定。

イ) 選考委員選出

出席者による2名連記投票で票数の多い上位4名を選出。

平石・片桐・朝倉・水口・水谷の5名が決定。

ウ) 書記幹事、会計幹事および各委員会委員長名を選出 【別室】

選出された選考委員5名と代表幹事の計6名にて協議。以下の人事を決定。

会計(平石)／書記(片桐)／販売・企画(朝倉)／調査・研修(水口)／広報(岩野)

エ) 各委員会の構成メンバーの選任 【別室】

* 選出された幹事(代表幹事、書記、会計と3委員長)により各員の希望も考慮し、

2017年度(第51回)人文会年次総会報告

書記幹事 片桐幹夫

2017年度(第51回)の人文会年次総会は、平成30年5月16日、「文化産業信用組合本部会議室」において全会員社出席のもとに開催されました。

議事は、2017年度(2017年5月1日～2018年4月30日)の活動報告(全般)から始まり、会計報告、次いで「販売・企画」「調査・研修」「広報」の各委員会報告および質疑応答、承認と続き、新年度に向けての役員改選及び各委員会所属メンバーを決定し、無事終了いたしました。

代表幹事には、昨年度に引き続き、全会一致で田崎洋幸氏(みすず書房)が選出されました。

会計幹事は平石修氏(御茶の水書房)、書記幹事は片桐幹夫(晶文社)が選出(いずれも留任)されました。委員会構成は昨年同様、「販売・企画」「調査・研修」「広報」の三委員会体制で会活動にあたることを確認しました。

各委員長(幹事)は、朝倉哲哉氏(法政大学出版局)が販売・企画委員長(留任)、水口大介(創元社)が調査・研修委員長(留任)、岩野忠昭氏(白水社)が広報委員長(留任)に選出されました。

また、平凡社の復会、誠信書房の休会が承認されました。

なお、平凡社の担当者は登尾純一氏となります。

各委員会の構成は、巻末の「人文会名簿」をご参照ください。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2018年8月現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
大 月 書 店	佐藤 信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
御 茶 の 水 書 房	平石 修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀 伊 國 屋 書 店	志田 則幸	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3122
勁 草 書 房	西野 浩文	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春 秋 社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶 文 社	片桐 幹夫	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房(休会中)		112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青 土 社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿樂町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創 元 社	水口 大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑 摩 書 房	藤井若菜彦	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	澤畑 壘	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日 本 評 論 社	五月女 公	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白 水 社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平 凡 社	登尾 純一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	朝倉 哲哉	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
み す ず 書 房	田崎 洋幸	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	須藤 圭	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
未 來 社	水谷 幹夫	112-0002	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-5596
吉 川 弘 文 館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事 田崎洋幸

会計幹事 平石 修

書記幹事 片桐幹夫

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会 ◎朝倉哲哉 ○森 卓巳・志田則幸・澤畑 壘・五月女 公・登尾純一・水谷幹夫

調査・研修委員会 ◎水口大介 ○片山伸治・西野浩文・藤井若菜彦

広報委員会 ◎岩野忠昭 ○乙子 智・佐藤信治・吉岡 聡・須藤 圭

人文会 ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>

(各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ)

「高校生のためのブックガイド」のご案内

人文会では会員各社の刊行物の中から、高校生に読んでもらいたい書籍を2点ずつ厳選し、「高校生のためのブックガイド」として1枚のリーフレットにまとめました。書店外商部様や書店店頭でのフェアなどで活用いただいております。



『人文書販売の手引き〔第2版〕』のご紹介

『人文書販売の手引き』とは、人文会が編集・発行する書店員様向け人文書販売マニュアルです。第2版はデータを大幅に更新し、より使いやすくなっています。『人文書販売の手引き』を店頭活性化にぜひご活用ください。

(前略) かしながら昨今、状況は一変しました。中堅やベテランといえるキャリアの方から教えを請われることが多くなり、このことは当然、若手の書店員の方々にも影響してしまいます。なので、このような状況を打破するためにも、マニュアルの作成が必要であると判断しました。

「人文書販売の手引き」には、役立つヒントは載っていますが答えは載っていません。あくまで骨組みの提示であり、肉付けするのはそれぞれのご担当者です。大変恐縮ですが、試行錯誤して頂きながら、個々のお店に合った答えを導き出して頂ければ幸いです。

「人文書販売の手引き」には、役立つヒントは載っていますが答えは載っていません。あくまで骨組みの提示であり、肉付けするのはそれぞれのご担当者です。大変恐縮ですが、試行錯誤して頂きながら、個々のお店に合った答えを導き出して頂ければ幸いです。

(『人文書販売の手引き』第2版刊行に際して)より)

[illegible]

『人文書販売の手引き』第2版は、人文会ウェブサイトよりダウンロードできますので、是非ご利用、ご活用ください。

<http://www.jinbunkai.com/>

『人文書販売の手引き [第2版]』

編集・発行：人文会

B5判並製84頁 2015年10月1日発行

ISBN978-4-915735-07-3 (非売品)

目録のご案内

人文図書3分野の基本図書および最新刊を網羅した年度版の図書目録です。

●人文図書目録刊行会発行 A5判・平均200頁 頒価本体(各)286円



◆哲学・思想図書総目録2018－2019年版

約2,100点(131社)収載。

〔掲載分野〕哲学・思想一般/倫理学・人生論/美学/各国哲学
/現代哲学/宗教一般/宗教学 ほか

ISBN 978-4-915268-40-3



◆心理図書総目録2018－2019年版

約2,800点(96社)収載。

〔掲載分野〕心理総論/基礎心理/発達心理/教育心理/臨床心理/精神分析/精神医学/社会心理 ほか

ISBN 978-4-915268-41-0



◆社会図書総目録2018－2019年版

約2,400点(118社)収載。

〔掲載分野〕社会一般/家族社会/地域社会/産業労働/福祉・教育/社会問題/文化文明論/文化人類学/民俗学ほか

ISBN 978-4-915268-42-7

* ご注文は書店にお願いいたします。

●人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7(みすず書房内)

●人文図書目録刊行会

〒162-8710 東京都新宿区東五軒町6-24(トーハンビル内)

TEL 03-3266-9521(事務局)

ヨーロッパの内戦

炎と血の時代一九一四——一九四五

エンツォ・トラヴェルソ著

宇京頼三訳

二つの世界戦争、スペイン内戦をはさんで
アウシュヴィッツ、ヒロシマ・ナガサキの
被爆まで、ナチズム、ファシズム、スター
リニズム等をめぐる「炎と血」の30年間を
論じ、現代の「移民」問題にまでつながる
壮大なヨーロッパ現代史。

3500円

加藤尚武著作集

全15巻

第2巻 (第5回配本)

ヘーゲルの思考法 6800円

第1巻 ヘーゲル哲学のなりたち 5800円

第4巻 よみがえるヘーゲル哲学 5800円

第6巻 倫理学の基礎 5800円

第9巻 生命倫理学 5800円

既刊本



未来社

〒112-0002 東京都文京区小石川 3-7-2

TEL03-3814-5521 FAX03-3814-5596

<http://www.miraisha.co.jp/> ※表示は税別

金持ち課税

税の公正をめぐる経済史

シーヴほか 累進課税を生んだのは世界大戦だったことを実証、今後の税議論に新たな回答を提示する。立木勝訳 三〇〇〇円

免疫の科学論

偶然性と複雑性のゲーム

クリルスキー 仕組みの解説を超え、免疫の総休へ。コレリ
ジュ・ド・フランス講義発の新免疫学。矢倉英隆訳 四〇〇〇円

ジャコメッティ

彫刻と絵画

シルヴェスター 芸術家に肉迫した金字塔的批評。ジャコメ
ッティBBCインタビューを完全収録。武田昭彦訳 五〇〇〇円

エコリアアス

言語の忘却について

ヘラー・ローゼン「流離」こそが言語の核心であると明かす。言語哲学の最重要書。待望の邦訳。関口涼子訳 四〇〇〇円

みすず書房 (税別)

東京本郷2-20-7 <http://www.mszz.co.jp>

刀剣と格付け

深井雅海著

徳川將軍家と名工たち

刀剣の鑑定、「享保名物帳」の成立、刀工と格付けなど、奥深い刀剣の世界へ誘う。

1800円



皇后四代の歴史

昭憲皇太后から
美智子皇后まで

森 暢平・河西秀哉編 時代とともに大きく変容してきた
役割を振り返り、皇后の「いま」を考える！ 2200円

アジア・太平洋戦争と石油

岩間 敏著 戦備・戦略・対外政策 総力戦の実態と末路
を、戦備も含めた豊富なデータをもとに解明。 3000円

吉川弘文館 東京都文京区本郷 7-2
☎03-3813-9151 税別

バナナのグローバル・ヒストリー

いかにしてユナイテッド・フルーツは世界を席巻したか

P・チャップマン 著／小澤卓也・立川ジェームズ訳
バナナが世界に広まってきた歴史的發展を、ユナイ
テッド・フルーツの盛衰を軸に、グローバル・ヒス
トリーの視点から描き出す。

※四六判・上製352頁 本体 3500円

小澤卓也 著 ※四六判・上製348頁 本体 3000円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税別／宅配可

映画「ゲッベルスと私」全国順次公開中

ゲッベルスと私

ナチ宣伝相秘書の独白

ブルンヒルデ・ポムゼル、トーレ・D・ハンゼン
石田勇治監修 森内薫 赤坂桃子訳

なにも知らなかった私に罪はない

ヒトラーの右腕としてナチ体制を牽引した
ヨーゼフ・ゲッベルスの103歳の元秘書が、
69年の時を経て当時を回想する。その発言は、
ハンナ・アーレントのいう「悪の凡庸さ」を
想起させる。

▼ 本体価格1900円＋税

紀伊國屋書店

出版部:東京都目黒区下目黒 3-7-10
営業TEL 03(6910)0519

嘘とヘイトが溢れる日本社会を
気鋭のジャーナリストらが問う

フェイクと憎悪

歪むメディアと民主主義

永田浩三 編著

46判・1800円

狙われているのは
9条改憲だけではない

右派はなぜ家族に 介入したがるのか

憲法24条と9条

中里見博・能川元一・打越さく良・
立石直子・笹沼弘志・清末愛砂 著

46判・1600円

東京文京 大月書店 電話03-
本郷2-27 3813-4651
otsukishoten.co.jp (税別価格)

慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp/>

歴史は実験 できるのか

——自然実験が解き明かす人類史

ジャレド・ダイヤモンド、ジェイムズ・
A・ロビンソン編著／小坂恵理訳



「実験」が不可能な
歴史事象に、新しい
比較研究・自然
実験の手法を駆使
して奴隷貿易からフ
ランス革命の影響ま
で、世界史の謎に
挑む! ◎2,800円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税抜】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

御茶の水書房

今井昭彦 著 対外戦争戦没者の慰霊

敗戦までの展開

菊判 五四〇頁・本体八八〇円＋税

反政府軍戦没者の慰霊

菊判 四六〇頁・本体七六〇円＋税

国家権力は戦没者を家族（遺族）の手から離し、強制的に靖
国・護国神社にカミとして祀った。しかし、伝統的な先祖祭祀
体系の土台であるイエではホトケとして祀ったのである。ここ
に宗教祭祀上の対立や矛盾、ねじれが生じた。

東京都文京区本郷5-30-20 ☎03(5684) 0751

歴史学者と読む高校世界史

教科書記述の舞台裏

長谷川修一・小澤実〔編著〕

高校世界史と大学の歴史学は別物？
吟味し、製作の舞台裏を明かす。

本体2500円＋税
世界史教科書の記述を

パンと野いちご

戦火のセルビア、食物の記憶

山崎佳代子

戦時下のセルビアで、難民となった友たちは何を食べていたのか。命をつないだ記憶と記録。

本体3200円＋税

飢えと豊かさ道徳

ピーター・シンガー／児玉聡〔監訳〕

豊かな国の人々には、世界中で飢えや病に苦しむ人々を助ける義務がある。シンガー哲学のルーツをなす論文。

本体1900円＋税

けい ほう

勁草書房

TEL 03-3814-6861

FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1

<http://www.keisoshobo.co.jp>

坐の文明論

人はどのようににすわってきたか

私たちの文明を物心両面にわたって育んできた「坐」の身体技法を、世界的・歴史的な視座からトータルに考察した、画期的な文明論。



矢田部英正

本体価格2200円＋税

晶文社

〒101-0051 千代田区神田神保町1-11

Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

2018-2019年版

哲学・思想図書総目録

哲学・思想一般 / 倫理学・人生論 / 美学 / 各国哲学 / 現代哲学 / 宗教一般 / 宗教学 ほか

心理図書総目録

心理総論 / 基礎心理 / 発達心理 / 教育心理 / 臨床心理 / 精神分析 / 社会心理 ほか

社会図書総目録

社会一般 / 家族社会 / 地域社会 / 産業労働 / 福祉・教育 / 社会問題 / 文化文明論 / 文化人類学 / 民俗学 ほか

◎A5判・平均200頁 ◎頒価本体各286円

人文図書録刊行会

〒162-8710

東京都新宿区東五軒町6-24

トーハンビル内



アメリカの大学生が 自由意志と科学に ついて語るようです。

アルフレッド・ミラー

蟹池陽一訳

人間は自由か？ 脳科学・心理学の多彩な実験から哲学する。

定価(本体2000＋税)

春秋社

東京都千代田区外神田2-18-6
☎03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

web春秋 はるとあき

<https://haruaki.shunjusha.co.jp/>

各紙絶賛 忽ち4刷



B.C.1177

古代グローバル文明の崩壊

エリック・H・クライン

安原和見=訳 2400円

ヒッタイト、ミタンニ、エジプト。一時代を築いた文明世界は“海の民”によって滅ぼされたと言われてきた。それは事実なのか？定説を覆した驚きの書。

筑摩書房

営業部 03-5687-2680

*定価は表示価格+税

<http://www.chikumashobo.co.jp/>

亡霊のジレンマ

カント・メイヤス

思弁的唯物論の展開

来たるべき神と全人類の復活を謳う表題作から、議論を呼んだラマルメ論まで。日本オリジナル論集。序文・千葉雅也

2200円

心の進化を説明する

ダニエル・C・デネット

バクテリアからハバへ
心はいつはじまり、どのように進化してきたのか。現代の科学は心をとここまで説明できるのか。哲学者デネットの新たな代表作。

4200円

はざまの哲学

野家啓一

どちらでもあり、どちらでもない、哲学的思索のラディカリズム。しなやかな文体で刻まれた、哲学的探究の軌跡。

2200円

青土社

東京神田神保町 ☎03-3294-7829

<http://www.seidosha.co.jp/> (価格税別)

小坂井敏品

神の亡霊

近代という物語

「責任」ある「主体」として語りふるまう我々の近代は、なぜ「それ以上問えない正しさ」=殺したはずの神の輪郭をいつまでも経巡るか。臓器の所有、性のタブー、死まで縦横に論じ反響を呼んだ『UP』連載に、著者の思索の軌跡をふんだんに注として加筆した渾身の論考。

四六判 / 336頁 / 本体2800円+税

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991

<http://www.utp.or.jp/>

創元社

近代日本の 旅行案内書図録

荒山正彦 著

明治・戦前の系譜を初めて体系化。高精細画像600点超。

B5判・並製・256頁 定価(本体4500円+税)

G・ド・ロビエ 写真 / J・ボセ 著 / 遠藤ゆかり 訳

世界図書館遺産

世界12カ国、23館の絢爛豪華な空間を約200点の写真で。
26cm×26cm・上製・248頁 定価(本体4500円+税)

大阪市中央区淡路町4-3-6

☎06-6231-9010 Fax06-6233-3111

千代田区神田神保町1-2 ☎03-6811-0662

2018年8月25日発行 年3回発行 第129号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みずす書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉